

ヨーロッパ中世の宇宙論

一橋大学 教授 阿部 謹也

西洋中世史研究にはこれまであまり注目されていなかったいくつかの難問がある。それは誰もが気付いていることであるが、ひとたび答えようとすると言葉が出てこないような性質の問題である。たとえば西洋中世社会にも日本の中世と同じく賤民がいたのだが、道路清掃人や刑吏、墓掘りその他の賤民が何故成立したのかという問題である。これまで何人かの研究者が答を出そうとしたが、いづれもうまくいっていない。さらにロマネスクやゴシック建築の柱頭や回廊を飾る怪物たちは一体何なのかという素朴な問がある。中世史の書物を一度でも読んだことのある人なら誰もが知っているこの怪物についてもこれまで十分な説明がなされてこなかった。それが天国と地獄の観念と深いかわりをもつことは容易に想像できるのであるが、中世の人びとがこれらの怪物をみたときどのような感情を胸に抱いたのかは皆目見当がつかないのである。このような疑問は中世末期に出現したヒエロニムス・ボスの一連の作品に収斂してゆく。ボスの作品には無数の怪物が登場し、あたかも怪物の百科全書の観を呈している。ボスの作品についてもこれまでさまざまな解釈の試みがなされてきたが、いまだ決定的なものはないといつてよいだろう。このほかにグリム童

話の源泉をなす中世の民話の世界もいまだ十分に解明されているとはいいがたい。

こうした難問をかかえたまま細々と研究をつづけてきたのであるが、最近になってこれらの難問を解決するための前提条件によるやく気付いたのである。それは中世社会の側にあったのではなく、私たち自身の側にあった。

私たちは産業革命以後時間と空間に関しては均質的な文明の世界に住んでいる。どこの国へ出かけていこうとも時計を現地時間に合せ、貨幣を両替すればさしたる困難なしにその国を旅することができる。地球上にはもはや未知の空間はなくなってしまい、どこへ出かけるばあいにも予定された日時には正確に帰国できるのである。個々の家のなかからも暗い部分は消え去り、皆明るく電気の照明をうけている。このような均質的な時間と空間の観念の世界と貨幣によって媒介されるモノの世界に住んでいる私たちは時間が均質的に流れず、空間も均質的ではなかった時代を想像することが困難になっていたのである。こうした現代社会の変化については誰でも承知しているのであるが、その変化の故に中世社会を理解することが難しくなっているという事実にはあまり注意が払われていないように思われる。賤民が何故成立したのかという根源的な問が西欧についてはあまり出されないのも西欧社会には伝統な賤民がすでに消滅しているためである。しかし日本には被差別部落があり、同和教育は今もって緊急の課題となっている。日本人には西欧賤民制の成立について問いかける十分な理由があるのである。私自身この問題を長い間追求してきたのだが、最近になって宇宙観の問題をぬきにしてはこれらの問題に答えることは不可能であるという感を深くしてきた。つまり現在私たち

はずでに述べたように均質的なひとつの宇宙の中にあると思っており、そこでつくられた尺度で過去を計っているのであるが、そのために中世社会が見えなくなっているのである。そこで中世の宇宙観をまず明らかにしなければならぬことになった。とはいえずでに多くの研究のある中世の神学者の宇宙観だけでは私たちの目的には不十分である。一般の人びとが自分の住む生活空間とどのような関係を結んでいたのかという点こそがとりあげられなければならない。

中世人は一般的にいつて二つの宇宙のなかで暮らしていたといつてよいであろう。この二つの宇宙は同心円とみることのできる。初期中世においては家を中心として庭や菜園、耕地を包摂した狭い空間が小宇宙 *Microkosmos* をなしており、その外には神々や巨人、小人、悪霊、死、病氣などが棲む大宇宙 *Macrokosmos* が広がっていると考えられていた。人間の生活に幸、不幸をもたらす様々な力は大部分大宇宙から小宇宙に送られてくるのであり、人間には大宇宙の諸力を制御する力はなかった。せいぜい占星術や呪術、予言、神々への祈禱を通して大宇宙の運行を予測し、それに対応しようとしていたにすぎない。大地、火、水、風などの四大元素はまさに大宇宙のものであり、それらの諸力に対して人間は何らかの儀礼を営んで対応していたのである。

一・三世紀以後村落共同体と都市共同体が形成され、従来の大宇宙と小宇宙の関係にも変化が生じた。今や数十戸を包摂する村落が小宇宙となり、村は垣 (*Ethen*) によって囲まれた平和空間となった。平和とは何よりもまず大宇宙から襲いかかってくる諸力に対して小宇宙を守ることなのであった。家のなかの竈に燃える火も料理用の水も、畑の土も大宇宙の要素であった。しかし人

間はこれらの大宇宙のエレメントを制御することによって小宇宙の平和を守ろうとしたのである。

共同体が成立する以前においては家ごとに大宇宙の神々や諸靈に対して儀礼を営み、大宇宙の諸力との関係を調整していた。これは基本的には互酬の関係であったといつてよいだろう。神々や靈に供物を捧げることを通して神々から守護を期待するのである。共同体の成立以後大宇宙と小宇宙のこのような関係に大きな変化が訪れた。何よりもまず大宇宙の神秘と直接にかかわる職業が専門職として成立していった点である。かつて処刑は高位者が行う神聖な行事であった。死とは小宇宙から大宇宙へ人間が移行することであったから、人間を処刑することはその人間を大宇宙へ送り届けることを意味し、特別な儀礼を必要としたのである。処刑を執行する者には特別な能力が必要であった。しかしながら都市の成立とともに死刑執行人が職業として成立し、やがて賤民職とされてゆくのである。同様にかつては大荘園にのみおかれていた水車小屋が村毎におかれるようになり、粉挽きが専門職として成立した。粉挽きは大宇宙のエレメントである川の水位を調節できる特異な能力の持主として畏怖的であり、死刑執行人と同様に大宇宙と小宇宙の狭間に生きる人間であった。この他にも数多くの、のちに賤民職とみなされる職業が成立していったが、それらはみな大宇宙と小宇宙の狭間に成立したものであった。身近かな例をとると、塵芥処理人や道路清掃人はまさに同じ位置にあるが故に畏怖の眠差してみられていた。塵芥は尿や糞と同様に現在の私たちにまだ汚いものとしてうけとめられている。しかし尿や糞そして塵芥は近代にいたるまで神秘的な性格をもつものとみられていた。魔女は秘薬をつくる時にこれらのモノを混ぜさせた

のである。人間の身体が口を通して受け容れたものは肛門その他を通して排泄される。これはひとたび小宇宙としての身体にとりこまれたモノが大宇宙に戻されることを意味し、尿や糞はすでに大宇宙の神秘性を何がしかもつものなのであった。聖人の尿を飲んで病を治した話などが伝わっているのもこのためである。埃や泥のなから生命が生まれるという観念も古来のものであり、道路清掃人が畏怖的であったのもまさに大宇宙と小宇宙の狭間にいたからに他ならない。

こうして一二・三世紀以降大宇宙と小宇宙の狭間に多くの職業が成立し、それらは皆異能力者として畏怖の眼指してみられていたのだが、のちにそれらが賤民とされていったのは何故か。この問題には広い視野と緻密な分析が必要なので、大まかな論断は許されないのであるが、ひとつの見通しをたてることは許されるであらう。

一三世紀末にはヨーロッパの村のほとんどに教会が設置されている。つまりこの頃によくキリスト教は社会の末端にまで届いたのである。重要なことはキリスト教が教義のうえでは直線的な歴史の解釈によって二つの宇宙の存在を否定した点にある。キリスト教の教義においては風も土も火も水も、死もすべて創世神話から最後の審判に向けて進行してゆく歴史のなかに位置づけられ、それぞれ何ら独自の宇宙を形成するものとはされない。この世にあるすべてのモノは神の栄光を讃えるという一元的な価値の

体系のなかに位置づけられることになる。このとき、かつて二つの宇宙の狭間で大きな力をもち、畏怖的であった人びととその職業はキリスト教の教義のなかでは何の位置ももたなくなつた。しかしながらキリスト教の教義は人々の日常生活の次元にまで十分に影響を及ぼしえなかつたから、人びとは日常生活の次元では二つの宇宙の存在を肌で感じとり、これらの職業の人びとに怖れを抱きながら、信仰の次元ではこれらの人間の存在を無視せざるをえない。このような状況におかれたとき、これらの人々に対する怖れの感情は賤視へと転化していったのである。

怖れから賤視への転化に際して力を発揮したのがキリスト教による天国と地獄のイメージであった。教義の上では最後の審判のちに出現する筈の地獄のイメージが現実のものとして描かれ、笛吹き男や踊り子などはまさに地獄の使者とされてゆく。このようなキリスト教による天国と地獄のイメージを最も豊かに描いたのがヒエロニムス・ボスであった。ボスは二つの宇宙の存在を十分に感得できる世界に生き、その地点からキリスト教の教義に批判の目を向けていたとみられる。ボスの絵のなかから私たちはこうした状況を十分によみとることができよう。ボスの絵に登場する怪物たちも、初期中世の建築にられる怪物も二つの宇宙の観念のなかに位置づけられたとき、はじめてその姿を現わすのではないだろうか。機会を改めてそれらについて詳論したい。